「これっておかしいよ」

取材の生の声を聞く
好評 人文・ジャーナリズム学科協力講座

取材最前線の記者・ジャーナリストから直接話を聞く、文学部人文・ジャーナリズム学科の協力講座が好評だ。毎日新聞社との「国際ジャーナリズム論」（担当・藤森研教授＝前期）と日本写真家協会（講師・桑原史成氏）による「報道写真論」（担当・山田健太准教授＝前期）だ。

今後、夏期休暇に沖縄タイムスとの「沖縄ジャーナリズム論」、後期に読売新聞社との「政治ジャーナリズム論」が準備されている。

◇

6月20日の「国際ジャーナリズム論」講師は毎日新聞外信部の大治朋子編集委員。前回に続いて2回目の登壇となった。大治記者は、北米総局（ワシントン）特派員時代、対テロ戦争の負の部分を明らかにした長期連載「テロとの戦い」（09年）の報道で、兵士をむしばむ外傷性脳損傷の多発、誤爆を招く米無人機の実態などを伝え、国際理解の促進に貢献した記者を表彰する「ボーン・上田記念国際記者賞」（10年度）を受賞した。社会部時代には02、03年度に新聞協会賞（編集部門）を連続受賞している。

今回のテーマは調査報道。これまで知られていなかった政治や社会の不正や問題点を追及、明らかにし、改善を促す調査報道の例として、毎日新聞の紙面を飾った、タイプの違う3本のスクープ記事を紹介し、それらが社会に及ぼしたと思われる影響について語った。

一つ目は、ゴッドハンドと呼ばれた考古学研究家が次々に発掘した旧石器の遺物がすべてねつ造だったことをスクープした「旧石器ねつ造事件」。記者の「こんなすごいことが本当にできるのか」という素朴な疑問が、教科書の記述を塗り替えるスクープにつながった。

次に、被害者の権利と支援策を訴える長期キャンペーン「片山隼君事故」は、刑事手続き運用の見直しや犯罪被害者保護法成立などに結びついた。端緒はダンプカーにひき殺された児童の母親から記者に届いた1枚のハガキ。遺族に十分な説明をしないまま、短期間の捜査で運転手を不起訴処分にした検察の対応を告発した。

三つ目の「防衛庁による情報公開請求者の身元調査事件」は大治記者自身のスクープ。行政機関による個人情報収集での暴走や、個人情報保護法の問題点を指摘。同法の付帯決議に、適正収集に関する規定が盛り込まれるなどの影響を与えた。

大治記者は、調査報道には「事象に近付く『虫の眼』、全体を見る『鳥の眼』、その事象を時代の流れの中で位置づける『魚の眼』を持つことが必要」と語った。

さらに、長期連載「テロとの戦い」により、自身がアフガニスタン駐留米軍にエンベッド（従軍）取材を行った様子を、ビデオを回しながら披露した。

「圧倒的な軍事力を誇る米軍が、なぜアフガンで苦戦するのか」――。この疑問を携えてワシントンから単身、バクティカ州（アフガン）へ。記者の乗り込んだ装甲車が、武装勢力が道路にしかけた手製爆弾を踏み、車体が大破。応援の部隊を待つまで長時間、どこから敵が来るか分からない極度の恐怖感に襲われた米兵たちの様子を生々しく伝えた。

「アフガン戦争は銃撃戦というより心理戦。米軍はじわじわとダメージを受けている。現場に行ってそれが分かった」と振り返った。

会場からの多くの質問に答え、「新聞記者は、日常の中から生まれる感性や『これっておかしいよ』というシロウト感覚が大事。『どうしても知りたい』という強い動機があれば厚いカベを乗り越えられる」とジャーナリストの姿勢を語った。

講義を聞いた笠井美月さん（2年次）は、「エンベッド取材の話は圧巻。『なぜ』という疑問から強い動機をもつことで答えを得られると思った。この講義は新聞記者の生の話が聞けるので毎回、楽しみです」と語った。

▲ 調査報道、エンベッド取材について講義する毎日新聞の大治朋子記者（写真はいずれも生田キャンパスで）

▲ 「報道写真論」で講義する報道写真家の桑原史成氏。水俣、ベトナム、カンボジア……取材を通じ、写真が持つ“力”をさまざまな局面で語った（6月21日）

豊潤な自然と文化の国・ラトビアを紹介

「独立・国づくりに燃えた」駐日大使 専大生170人に講演

ラトビア共和国のペーテリス・ヴァイヴァルス駐日大使が生田キャンパスで、専大生170人を前に、ラトビアを紹介し、日本との関係などを語った。

総合講座「翻訳文化論」（高橋龍夫文学部教授）の授業の一環で、同講座は、ラトビア文学翻訳家の黒沢歩さん（平3文）が、5月26日から4回にわたり、ラトビアと日本の文化交流や翻訳事情についてを講義。最終日の6月16日は、特別ゲストとしてヴァイヴァルス大使が講演。黒沢さんが通訳を務めた。

ヴァイヴァルス氏は、旧ソ連から再独立後初の駐日大使に就任（2006年）。両国の国交関係と交流促進に幅広い分野で貢献し、全国の小・中・高の児童・生徒や大学生を対象とする講演を積極的に行っている。

ロシアとヨーロッパに隣接するバルト三国の一つであるラトビアは、地理的背景からさまざまな周辺国から支配されてきた苦渋の歴史がある。

同時に、多民族多文化国家で誇り高い国民性、国土の56％が森林という豊かな自然を持ち、各地でダイナースと呼ばれる独特の民謡が継承されている。首都リガで5年に一度、国民総出の大合唱・舞踊祭が開催されているなど、文化を大切に守る姿や人々の暮らしぶりを紹介した。

興味深い 日本での体験

講演後、学生からの質問にユーモアを交えながら答え、「ソ連が崩壊し独立直後のラトビアは、日本の明治初期と状況が同じ。若者たちが国づくりに燃え、私もエンジニアから外交分野に進んだ。5年前に来日し、（本日一緒に来学した）オレグス・オルロフス次席と共に、ゼロからのスタートで大使館を開設できたのはうれしいこと」と語り、「日本での体験は興味深いことばかり。専修大学で大勢の学生の皆さんにラトビアの話ができたのは貴重な機会となった」と結んだ。

※総合講座「翻訳文化論」は、翻訳の対象を文学や、民俗、文化、芸術、社会という広義にとらえ、異文化翻訳の意義と役割、その問題点を多角的に考察する。本年度は韓国とラトビアを取り上げ、グローバリズムにおける翻訳文化の意義をとらえる。

▲ 170人で埋まった会場。檀上は黒沢歩さん

▲ 講演するヴァイヴァルス大使

高大連携

5月から7月にかけて高大連携協定校、付属高校との連携活動が行われた。

●都立狛江高校

5月26日、生田キャンパスに3年生27人が訪れ、大学紹介ビデオを鑑賞ののち砂原由和ネットワーク情報学部教授の模擬授業＝写真㊧＝を聴講し、付属高校出身者で組織する「Hi・Yo・Co（ハイヨコ）の会」学生が引率してキャンパス見学を行った。

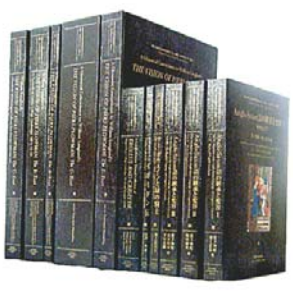
●専大松戸高校

6月5日、生田キャンパスに1年生485人が訪れた。室井義雄副学長の講演では「今日のキャンパス見学を通して本学の現状について理解を深め、普遍的なことを幅広く学ぶ大学生活というものを知っていただきたい。みなさんには、学力偏重主義、学閥といった考え方から脱却し、自由で楽しい高校生活を送ってほしいと心から願っています」と語った。講演のあと「Hi・Yo・Coの会」学生の引率するキャンパス見学に参加するなど貴重な一日を過ごした。

▲ 室井副学長

●専大松戸フェスティバル

7月9日、生田キャンパスに2年生312人が参加し、全学科の講座を開講して学科の理解を深めるとともに「Hi・Yo・Coの会」企画による「大学理解企画」＝写真㊧＝と題したキャンパスライフの紹介が行われた。



▲ 言語・文化研究センター叢書

▲ 専修大学図書館所蔵西洋写本ファクシミリ　『万国史』

中世英語英文学研究の集大成

叢書全11巻と写本ファクシミリ全3巻完成

2005年度から09年度まで展開したプロジェクト「Anglo-Saxon語の継承と変容」（松下知紀代表、文部科学省オープンリサーチセンター整備事業）における研究の集大成である『専修大学社会知性開発研究センター／言語・文化研究センター叢書』と『専修大学図書館所蔵西洋写本ファクシミリ』がこのほど完成した。

叢書は「サー・ガウェインと緑の騎士」「イポミドン伝」など全11巻。中世英文学、言語理論、西洋写本学研究発展にも寄与する探求の集積となる。

『専修大学図書館所蔵西洋写本ファクシミリ』は『POLYCHRONICON（万国史）』など全3巻。オールカラー複製で、西洋写本の逸品をほぼ原本に近い縮尺で復元した。

注文、問い合わせは発行の専修大学出版局☎03（3263）4230へ。